

紫式部

——忙しき目覚めに

長谷川時雨

青空文庫

八月九日、今日も雨。

紫式部をもととした随筆の催促が、昨日もあつたことを思つて、戸をあけてから、蚊帳かやのなかでそんなことを考える。

水色の蚊帳ばかりではない、暁ぎょうあん 闇あんばかりではない。連日の雨に暮れて、雨に明ける日の、空が暗いのだ。それが、簀戸すどを透して、よけいに、ものの隈くまが濃い。

濡れた蝉せみの声、蛙も鳴いている。

今年こしは萩はぎの花がおそく、芒すすきはしげっているのに、雁来紅がんらいこうは色あざやかだがばかに短く細くて、雁来紅本来のあの雄大な立派さがない。

ふと、紫の一本が咲いているのが目につく。野菊ではない。友禅菊という、葉や、咲きかたや色の今めかしい品ひんのない花だが、芒のかげに一叢になつてゐるのは、邪魔にもならないのでそのままにしてあるが、初元結はつもとゆいにはとてもおよばない。

初元結といへば、ずっと前に、もう物故なくなつてしまつた朱絃舎しゅげんしゃ浜子が、これが、初元結だといつて、一束の菊の苗をもつてきてくれた。可愛がつて育てると、葉は紫苑しおんのさきの方に似て稍強ややく、スツとして花は単弁で野菊に似て稍大ややきかつた。

その葉の色の青さ、その花の色の紫、それこそ春の山吹とともに、王朝時代の色をもつた花だと見た。

その、初元結は、浜子のうちのも、あたくしのうちのも震災で

どうなったかわからなくなってしまうた。

浜子は源氏物語愛好者、娘時代から去年果^{こそ}てるまで、繰返し愛読していた。それも、ただ読流すのではなく、研究的に読んでいた。

けれど、わたしは、いつも忙しく暮しているの、年更^たけてから、用のほかはゆつくり話あつた日がすくないので、どんな風に、あの物語につき、紫女^{しじよ}について考えているかを聞^{きき}洩^{もら}してしまつた。

初元結をもつて来てくれた時分のこと、あたくしは彼女のことを、いかにも明石^{あかし}の上^{うえ}に似ているといったことを、書いたこともある。

それは、朱絃舎浜子の爪つま音が、ちよつと、今の世に、類のないこと箏の妙音であること、それは、古いにしへから今にいたるまでも、数少ないものであろうと思つていたし、性格やその他、明石の上にたぐえる人だったので、白粉うすぎらいな彼女のことを、この明石の上はお色が少々黒いといつたらば、上うへも浜育ちでしたらうと彼女は笑つた。

明石の上も明石の浜育ち、自分も横浜の浜育ちという諧かいぎ謔やくであつたのだ。

彼女は、あたくしが、まだ唐人とうじん鬘まげに結つていた十幾いくつ歳かの、乏しいお小遣いで、親に内密で買った湖月抄の第二卷門石の巻の一綴りに、何やかや、竹柏園先生のお講義も書き入れてあるのを、

自分の参考にもつていったまま、ずっと手許においてあつたが、これも、震災で焼けてしまった。どうしたことかその一冊だけが、おさない手ずさびの記念のように、はいばら榛原の千代紙で上被いがしてあるのであつた。白い地に柳やら桜やらの細こまかい細かい模様であつたが――

あたくしの昨今は、トウチカの中に暮しているように、自分というものがすこしもないので、夜中でも真昼でも、寸分のくつろぎがない日を送っている。目を覚ませば昨日のしのこしたこと、今日のこと、明日のこと、仕事と家事のほかは、病む人の神経が、あやつ操りのようにあたくしの神経の全部に走り、それを意識して意識

しないふうには、甚だ無神経な奴になつていなければ、病人も家のものもみんなしか響めツ面になつてしまう。

で、あたくしが、すこしでも考えこんでいるということとは、それが、庭などを、何気なく眺めていることでも、間違われやすく、何か苦慮しているかととられる。

紫式部のことも、以前、あれこれと考えたことはあつたが、すべてが浅々あさしかつたと思うので、古いことは思い出さないことにして、さて、何を、この中でまとめられるものではない。今も、雨の朝の紫色の小菊を見た一瞬、そうだっけ随筆の題がなるべく紫式部をとこのだつたがと、思いはしても、どうして、そんな、チヨロツケに書けるものではないと打消す下には、さまざまな、

仕事の腹案や、雑務のおくれがちなのが、あれもこれも胸を突いてきて、蒸暑い室のなかの、古い書籍ほんや紙の匂いが——悪い印刷インキの香は堪らない。

かつてわたしは、紫式部が、いろいろな女性を書いて来た後に、てならい手習きみの君——うきふね浮舟を書いたことに、なんとなく心をひかれていた。

美女、才女、ありとある、一ひとつし節ふしずつある女にょしやう性せいを書いたあとで、浮舟や女三宮の現れたのを、よく読んで見たいと思つた。今でもそう思っている。

その後、また、ふと、夕ゆうが貌おの宿の仮寝の夜の、あの、源氏の

君の頭もとに来て鳴いている蟋蟀こおろぎのことから、源氏ほどの人を、あの市井の中に連れて来て、賤しずの生活の物音を近間ちかまにきかせた手腕に驚いて、そういう意味で、も一度も二度も読み直そうと考えた。

そのいづれをも果していない。

何か、最近の感想で、紫式部に関したことはなかつたかと、心の頁ページを繰返して見ると、あつた。

それは、つい先日、一葉全集評釈の筆をとつているときに、一葉女史の小説のなかに、源氏物語がどんなに浸みていることかと驚いた。それで、一葉女史の後期——二十八年後半期の作の二、三を除いたらば、殆どといってよいほど源氏物語の影響下にある。

そのくせ、一葉女史その人は、日記のなかや、感想文などでは清少納言の方を挙げている、好きでもあるようだ。一葉女史の性格も、どっちかといえば清原きよはらのおもとのようきよはらで藤式部とうしきぶのおもとのようではない。

あたくしは影響えいぎょうの下もとという言葉をつかったが、それは取り下げるとしてみても、その引例の多いことは、ちよつと考えると、「たけくらべ」などは、浅草吉原裏くるわの廓くわくにちかい、大音寺前だいおんじまえという、細かい生活くらしや、特殊な町の少年少女たちのことを書いたものだが、その中にすら、みどりという娘の周囲を、若紫わかしずのそれにもつともこの件は、源氏物語と柳亭種彦にせむらさきいなかげの「偽紫田舎源氏いせむらさきいなかげ」とが、ないまぜに出ているが——結びつけ形容している。

そこで、傑作「たけくらべ」は別として、全集中で、あんまり源氏や、その他の古歌によりすぎている作は、一葉の小説としては未熟の方に属すと、忌憚きたんなくいえばいえる。

なぜだろうかと、首をひねったが、一葉女史ほどの人でも、あの大きな「源氏物語」という小説から、小説を書こうと思いたった時、逃れられなかったのだ。

明治新文学の時代が早く、すべてが若かった時なので、時の人の作もよく読み研究したであろうが、紫式部という偉大なる女性作家が、王朝の昔に、あまり大きな影を投じているので、ともすればその着想行文が目の前に現われて来たのだと思う。

一葉女史は、もとより和歌の畑から出て、和文を多く読んだの

であるから、よく、源氏物語の妙味に通じていたと思つて差支えはなからうし、それなればこそ、ともすると引きごとに源氏物語の人物、風景を出すことによつて、自分が、その景情けいじょうに、いうにいわれぬ雰囲気と、醸かもしいだす情緒の満足を感じたのではなからうか。

清少納言の感覚の新鮮さ、鋭さ。

あの鋭さが、紫式部にないといえようか。しかし、ああいうふうに出したらば、あの大きいなる作品は残せない。

だが、あたくしは随ずい処しよに、底に秘めた鋭いものを感じる。柏木右衛門督かみが、源氏の君の、見るとしもない一瞥いちべつを、心の底にまで感じて神経衰弱になつて死んでしまう気の咎め——

いとあはれに眺めたまふと、しとしと書いてあつてもどれもこれも、なかなか、ゆつたりと太い男女のいる世界に、あの、柏木の督を書いた彼女は、どっしりとしていて鋭敏なものを蔵ぞうしていると思える。

紫式部はポツトリと白く肥つていはしなかつただろうか、ヒステリックでないことはたしかだ。

酒さきを一盞ひとつきと、盃を手にした姿も想像する。

なんにしても、大きく、珍しいほど豊かな女性であることは、好き不好きでなく、有がたい人が居てくれたものと、ふと、現代の作家に見渡すと、なんとなく岡本かの子さんに、新らしい時代の新らしい感覚、学問、知識の紫式部を何処どことなく見出す。

——「日本文学」昭和十三年九月一日——

青空文庫情報

底本：「長谷川時雨作品集」藤原書店

2009（平成21）年11月30日初版第1刷発行

底本の親本：「働くをんな」実業之日本社

1942（昭和17）年5月

初出：「日本文学」

1938（昭和13）年9月1日

入力：kompass

校正：Juki

2013年7月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紫式部

——忙しき目覚めに

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 長谷川時雨
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>